# 質的心理学者への祈り、そして、願い

## ＜学び＞の意味と構造を考えつつ、心理学研究者としての彷徨の跡を省みて

吉田　章宏

淑徳大学　総合福祉学部　実践心理学科

日本質的心理学会の第五回大会にお招きをいただき、大会記念企画講演の機会を与えられたことを、光栄なことと喜ばしいこととも思い、まず、企画者の大会委員長はじめ関係者の方々に、感謝の意を表します。

質的心理学の代表的な専門研究者の方々の集いにおいて、記念講演として、いま何を語ることが相応しいか、いろいろ考えてみました。(1)本大会のテーマが＜学び＞に関わること、(2)省みれば、心理学研究者としての私の生涯の歩みは、人間の＜学び＞を＜学ぶ＞私の彷徨の旅であったこと、(3)その＜学び＞の彷徨の跡から、私にも、心理学の将来を担う方々に、お伝えすべき何事かがあるに違いないこと、(4)与えられた短時間の中でも、ご一緒に考え＜学びあう＞ことに将来に向けた意味を見出しうるであろうこと、以上の4点を考え合わせました。そして、この記念講演を意義深いものとすべく、私なりの努力を傾け、凝縮された時をご一緒に楽しみたい、と考えました。

第一に(A)、お話する中身で、欠かすことが出来ないのは、私の研究上の個人的経験史です。これは、そもそも、私が、ここにお招きくださることになったきっかけが、18 年前、私が書いた文章(吉田章宏、1990)を読んでくださったことであったということ、そして、そのような中身の話をぜひとも含めよ、と望んでくださったからです。実は、あの文章の執筆は、あの頃、諸事情から、孤独感を深めていた私が、親友の現象学的心理学者Amedeo Giorgiを日本に招き、諸大学の訪問に同行しながら、私の思いを語ったところ、その思いを率直に書く機会を持てばよいではないか、との挑戦と激励を受けたことが、一つのきっかけともなっています。その個人的背景には、1980 年から一年間を過ごしたPittsburgh のDuquesne 大学の心理学科での親交がありました。私の思いつめた気負いにも関わらず、発表した当時、読者からの反響は何もありませんでした。いや、そもそも読者が居なかったのかもしれません。その後、5 年して、先輩の伊藤隆二さんが、暖かい共感と励ましの文章(伊藤隆二、1996a)を書いてくださいました。しかし、それからまた、12 年を経て今日に至っています。単純化して言えば、18 年を経て、あの文章が、今回のこの出来事を招いているのです。そのことに私は驚いています。日本では語ることの少なかったDuquesne大学での経験なども、お話したいことです。それから、私が現在の私にたどり着くまでの経緯として、波多野完治、斎藤喜博、武田常夫、林竹二、西郷竹彦、蘆田恵之助、竹田青嗣、等の先人と友人、また、神谷美恵子、荻野恒一、ベルク、安永浩等の精神病理学の方々、また、キーン、Manen, Polkinghorne、Halling, Smith, Kunz などの友人たちとの出会についても、語りたく思います。さらにまた、その研究上の前史には、数量化理論、因子分析、ピアジェ、オースベル、ルビンシュテイン、サイバネのアシュビー、情報理論、システム理論、など、まさに彷徨の歴史があります。しかし、個人の彷徨の物語だけを、老いさらばえた老人の愚痴や繰言としてお聞きいただくだけでは、やはり、記念講演としては相応しくないでしょう。人間の物語は、常に、現在の視点から語られ、将来に向けて語られるべきものです。そのためには、過去の物語から学んで、現在を語り、将来への展望を積極的に開くことを目指さなくては、とも思います。「質的心理学」。私自身は、自らの＜学び＞の研究を、質的心理学としてよりは、むしろ、1975 年頃からは、「教育実践の、とりわけ、授業実践の現象学的心理学」という自己理解をしています。それも恐らく、「質的心理学」の一隅を占めるでしょう。そこに至る途上では、末尾の文献表に含めたものも幾つか書いてきました。そこで、敢えて、現在に至るまでの私の「主観的」な彷徨の物語を語らせて頂きます。想像上、彷徨の旅を同行し、共感的にお聴き頂ければ幸いです。

第二に (B)、より一層「客観的」なお話もしたいと思います。友人たちが寄稿しているSmith(2003)の『質的心理学』の中にも、「現象学的心理学」が含まれています。しかし、現在の「質的心理学」全般の動向について語ることは、無知な私の任ではありません。で、少なくとも、その一部としての現象学的心理学について、私の知る限りの範囲で、お話しすることで、「客観的」であることを期待されている記念講演者の役割の一部を果したい、と思います。筑波大学には、日本心理学会 (1990 秋) の際、早坂泰次郎教授と共に、Amedeo Giorgi 教授の講演の機会を設けていただいたというご縁があります。ジオルジ教授については、Giorgi,A.

(1971).(1985)などがあります。現在も読むに値する著作です。また、ジオルジ.(1990),(2004ab)のような私による翻訳・紹介もあります。で、いわば客観的に、ご関心をお持ちの方々に向けて研究事情なども、多少は、ご紹介すべきかな、と思ってもいます。例えば、人間科学研究国際会議(International Human Science Research Conference)のことなど（http://www.himolde.no/conf/ihsrc/2009)。私は、この会議の比較的活発なメンバーの一人です。2001年には、大正大学カウンセリングセンターのご好意により、東京会議を開くことが出来ました。そこで、精神医学者の安永浩博士のご講演( www.yas73.jp/index.htm )をいただく機会にさえ恵まれました。また、国内では、東京大学の中田基昭教授が持続してくださっている地味な研究論集『学ぶと教えるの現象学研究』の13号の刊行が来年春に予定されており、古書市場では「洛陽の紙価」を高めている様子です。日本の「質的心理学」の勃興と隆盛に通底しているのかもしれません。

こうして見てきますと、Wauchope/安永浩の「パターン」(A/B)の考えが、私の心の中では、自ずと浮かび上がってきます。「ひとつのパターンとは、諸部分をもつひとつの全体、その全体と等価なる諸部分」と安永博士は訳し、この言葉は、体験性質の二つの側面を例示して、「パターン」という用語を「わからせるため、のみこませるため」の概念である、といいます。パターンは、「模様、という訳でまず正しい」とされ、「A／B」と記号化されます。「結局、すべての体験はパターンなのである。それらはそのつど、適宜適用しうる対のカテゴリーで成り立っている」(安永浩、1987、14)。その例としては、「全体/部分」、「**質/量**」、「**自/他**」、「**主観/客観**」、「無合理/合理」、「精神/物質」、「意識/実在」あるいは、「生/死」のように、後者は前者を「論理的必然的先行者」とし、後者はそれに対して「条件的偶然的」である、非対称の関係にある、とされます。

以上のような背景を踏まえて、客観的条件の要請にも応えて、以下のような内容を構想してみました。当日までには、何とか40枚ほどの文章にまとめて、会場で配布することが出来れば、と願っています。さて？

参加くださる皆様の、これからの実践と研究の深化と発展に少しでもご参考になることがお話し出来ればと願い、私なりの努力を尽くします。当日参加くださる皆様との「出会い」を心から楽しみにしています。

1. **説明のパターン(A/B)**（Wauchope /安永浩）について:「主観/客観」、「自/他」ついで、「質/量」
2. (A):パターン「**主観/客観**」の(A)「**主観**」:
   質的心理学の一隅へ到った私の道:私の彷徨の跡を辿って現在の視点から眺望する「主観像」
3. (B):パターン「**主観/客観**」の(B)「**客観**」:
   「質的心理学」の一部分としての「現象学的心理学」の、私の現在の「主観的」視点からの、「客観像」
4. (A/B)「質的心理学」の現状について無知なる私の視点から想像あるいは妄想し空想する「質的心理学」
   A. パターン「質/量」の「**質**」:説明と理解、記述的心理学:意味と構造、「比喩としての数学」
   B. パターン「質/量」の「**量**」:数量的心理学と数学的心理学:数量化と構造化
5. 「質的心理学」の将来とその展望:**統合的心理学(A/B)への道**

質的心理学者に贈る、私の祈り（Prayer）と願い（Request)。（“A monologue **B**ut also a dialogue” “A/B”）

文 献 表


蘆田恵之助（1988）『蘆田恵之助　国語教育全集』、全25巻、明治図書

伊藤隆二（1996a）「教育心理学の思想と方法の視座：『人間の本質と教育』の心理学を求めて」、『1995年度　教育心理学年報』第３５集、127 - 136

伊藤隆二（1996b）「人間性心理学の主題と方法について：神谷美恵子の『生きがい』研究を中心に」、畠瀬稔編、『人間性心理学とはなにか』、65－97、大日本図書

荻野恒一（1973）『現象学的精神病理学』医学書院

神谷美恵子（1966）『生きがいについて』みすず書房

キーン、E.(1989)『現象学的心理学』、吉田章宏・宮崎清孝　訳、東京大学出版会

西郷竹彦(1996－)『西郷竹彦文芸・教育全集』全36巻 別巻３、恒文社

齋藤喜博全集、第一期、第二期、国土社

ジオルジ、A(1990)「現象学的心理学の今日的諸問題」、『人間性心理学研究』編集・翻訳　吉田章宏　第８号 3 - 15

ジオルジ、A.(2004a)「看護研究への現象学的方法の適用可能性」、訳・構成　吉田章宏、
『看護研究』第37巻、第5号、49－57、医学書院
ジオルジ、A.(2004b)「経験記述資料分析の実際:現象学的心理学の『理論と実践』」、訳・構成　吉田章宏
『看護研究』第37巻、第7号、63－75、医学書院
武田常夫(1990/1971)『真の授業者をめざして』国土社
中田基昭編(1987・2008)『学ぶと教えるの現象学研究』全12巻、
東京大学大学院教育学研究科教育創発学コース
ベルク,V．d．(1976)『人間ひとりひとり:現象学的精神病理学』早坂泰次郎/田中一彦　訳、現代社
安永浩（1987）『精神の幾何学』岩波書店
安永浩（1992）「安永浩著作集」全4巻、金剛出版
吉田章宏（1987）『学ぶと教える：授業の現象学への道』海鳴社
吉田章宏（1990）「『教育心理学』に期待する一つの遠未来像:僻地にある『迷える小羊』からみたその眺望」
『教育心理学年報』、第二九集　別冊、142－153
吉田章宏（1995）『教育の心理:多と一の交響』放送大学教育振興会
吉田章宏（1996）『子どもと出会う』岩波書店
吉田章宏（1999）『ゆりかごに学ぶ　教育の方法』一茎書房
吉田章宏（2004）「発問の芸術にみる開放性：ある達人教師による実践の現象学的解明」、
『淑徳大学院社会学研究科研究紀要』第11号、1－34
吉田章宏（2005）「『説明』を誘う発問と『理解』を誘う発問：ある達人教師の授業実践における発問芸術
の現象学的解明」、『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第12号、39－82
吉田章宏（2007）「統合的な臨床実践学をめざして：臨床実践体験と臨床実践理論について」、
『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第14号、1－43
ルビンシュテイン著（1960/1961）『存在と意識』上/下　寺沢恒信訳　唯物論叢書　青木書店
ルビンシュテイン,S.L.（1981~1986）『一般心理学の基礎』全四巻、秋元春朝、秋山道彦、足立自朗、
天野清、佐藤芳男、松野豊、吉田章宏　共訳　明治図書
Arnheim,Rudolf (1969) *Visual Thinking*, Univ. of California Press
Flavell, John H. (1963) *The Developmental Psychology of Jean Piaget*, D.van Nostrand
Giorgi,Amedeo (1971) *Psychology as a Human Science*, Harper & Row
Giorgi,Amedeo ed. (1985) *Phenomenology and Psychological Research*, Duquesne U
Kunz,George (1998) *the paradox of power and weakness*. SUNY Press
Manen, Max van (1990) *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*. SUNY Press
Smith, Jonathan A. ed. (2003) *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods*, Sage P.
Spiegelberg,Herbert.(1972) *Phenomenology in Psychology and Psychiatry*, Northwestern UP
Spiegelberg,H.(1971) *Phenomenological Movement: A Historical Introduction*, II vols. Martinus Nijhoff
Strasser,Stephan.(1985) *Explanation and Understanding: Basic Ideas Concerning the Humanity of the Human Sciences*, Duquesne UP
Yoshida, Akihiro (1992) On the Why-What Phenomenon. A Phenomenological Explication of the art of asking questions. *Human Studies*, 15. 35-46
Yoshida, Akihiro (2001) My Life in Psychology: Making a Place for Fiction in a World of Science, *The Journal of Phenomenological Psychology*,vol.32. No.2. 188-202
Yoshida, Akihiro (2006) On Tamamushi-iro Expression: A Phenomenological Explication of Tamamushi-iro-no (Intendedly Ambiguous) Expressive Acts. *Essais de psychologie phenomenologique- existentielle, Cirp:Cercle interdisciplinaire de recherches phenomenoligique, vol. 1.* 300-335
文献表は、仮に、当日の「出会い」の機会が失われた場合にも、「手掛かり」を残そうと願い、作りました。

日本質的心理学会　第5回　総会　２００８．１１．３０

大会テーマ：＜学び：変化の喜びとしての質＞

大会記念企画講演

# 質的心理学者への祈り、そして、願い

## ――＜学び＞の意味と構造を考えつつ、心理学研究者としての彷徨の跡を省みて――

淑徳大学　吉田章宏

謝　辞　ありがたく、うれしい。「変化の喜び」である。

＜裏 GUAM＞（胡麻すり誤魔化し偽装に欺瞞虚八百のアリバイ作り挙句の果ては、無為無策、無謀で無理に無責任）：

＜表 GUAM＞（愚直に頑張り、頑固な憂いに、哀と愛とをもっともっと、真に誠、実に信、慎に、・・・）

心を澄ませ、率直に正直に。　沈黙はよい。が、嘘は言わない。「問い」を大切に。喜びを大切に。本気であることを大切に。

「共に育ちましょう」（蘆田恵之助）の心でお話ししたい。

全米物理学会１０周年記念大会での Powers of Ten（Charles Eames）のこと。

安永浩の「精神の幾何学」の、＜天の神＞の視点と＜地の蟻＞の視点の比喩：パターン「A/B」により話をすすめる。

「精神の基準線」：「私、私の図式、世界の図式、世界」＜eEWw＞.

日本質的心理学会　の過去４回の大会の歴史に寄せて、「起承転結」と４段階で語ることを試みる。

## １）起承転結の起：私の彷徨の跡を省みて　ある生涯の物語（A）

１．私の人生は、世界定住よりも世界移住が激しかった、と見える。省みると、世界の間の彷徨と移住を経験できたと、実感できる。English version:　My Life in Psychology でも述べている。75 年の人生を 15 分で話そう。

２．東京市神田に神田明神の氏子として生まれた。比較的裕福な商家の長男として育った。人の出入りが多かった。「豪い」読書家に育った。講談・落語・冒険小説・探偵小説・歴史小説・少女小説などなどの世界に夢中に遊ぶ。当時は、軍国日本で「理科教育」盛ん、発明展に憧れる。小学校（戦中の国民学校）入学は日米開戦の 1941（昭和 16）年。米軍による東京空襲、疎開、5 回の転校、5 校の世界を経験。

３．1945 年ポツダム宣言受諾。常勝軍国日本の「大日本帝国」の大東亜戦争の世界から、一転、敗戦日本の「三等国」平和民主主義国家「日本国」の世界へ。「180 度の価値転換」を経験。

４．戦後、中学２年生の春、裕福な生活世界から、貧乏のどん底の世界に。東京・関東の世界から大阪・関西の世界へ。

５．終日軟式野球の新制中学２校（神田・今川中学と大阪難波・南中学）。都立日比谷高校（旧制都立第一中学校）。新制中学の秀才の世界（1947－50）から高校の凡才の世界（1950－53）。日比谷高校で、数学教師・岡田章先生と出会う。生涯の交わりとなる。

６．大学浪人２年、凡才の世界からさらに脱落者「２年浪人」の世界へ。自信過剰世界と自信喪失世界の間の落ち着きのない往復。

７．誇り高き理科一類に、将来は数学を専攻することを望んで入学。（知らぬうちに、客観的には、数学の「秀才」の一人となっていた。しかし、その時点では、主観的には、受験秀才中の凡才に過ぎなかった。）

８．駒場教養学部で「青春彷徨」。理科の世界から文科の世界へ、初めて自律的に移住。

9. 三木安正先生の人柄に惹かれて、未知の教育心理学の世界へ。（同大学院を含め東京大学に 10 年在学）。

10. 心理学の世界では、数量化心理学の世界（心理測定、数量化、因子分析）への熱中の歓喜から幻滅の悲哀へ。波多野完治先生のお導きで唯物論心理学の世界（ルビンシュティン）へ。

11. 唯物論心理学の世界に並行して、認識心理学の世界（サイバネテックス、システム論、ピアジェ、ブルーナー、オースベル）へ。

12. 日本の東京大学の世界から、米国のイリノイ大学院の世界へ。3 年で Ph.D。イリノイ大学に助手として勤務 3 年（1964－67）。

13. 中西部イリノイ大学の世界から東部コーネル大学の世界で 1 年余（1967－1969）。

14. お茶の水女子大学に 3 年（1969-1972）、東京大学に 23 年勤務（1971－1995）。その間、デュケイン大学（現象学的心理学）に 1 年（1980－81）フルブライト上級研究員。東京大学定年退職後、岩手大学に 3 年、川村学園女子大学に 3 年在職し、淑徳大学に、現在まで 7 年半在職している。非常勤では、東京大学教養学部、同工学部、お茶の水女子大学、都留文科大学、群馬大学、中央大学、埼玉大学、岩手大学、京都大学、大阪大学、岡山大学、九州大学、立教大学、日本女子大学、放送大学などで多くの学生と出会う。

15. その間、1971 年から 1982 年まで、約 10 年間、斎藤喜博先生指導の教授学研究の会の活動に活発に参加していた。

以上における<学び>の経験を「自伝風」に書いてみた。が、簡潔に書こうとしても400字で８０枚に達してしまった。その時点で、これは今回の講演には使えないと、講演のために自伝を書くことを、断念した。

蘆田恵之助の言葉「自伝を書いてみて、これは自分のためにする大切なことだとわかりました。・・・」（「恵雨自伝」、上、7）

大会テーマには「変化としての喜びの質」とある。それは、さらには、「変化としての<学び>の喜びと悲しみ、その質」という主題ともなろう。<学び>は、必ず<変化>を伴い、<変化>には、<喜びと悲しみ>を伴うこと。さらに、その<喜びと悲しみ>の質は、<変化>を求める人間が、何を求めて、どのような<変化>を求めたのかということに対応して、条件づけられる。

この自伝の中から、語り損なえば悔いがのこると思われる事柄からまず語りたい。その後で、時間が許す限り、さらに、その場で（impromptu ）心に浮かぶことを、自由に語ることにしたい。

０．心理学における数量化と因子分析をめぐる<学び>の喜びと悲しみの経験（1961－1962）。

１．Duquesne U、Pittsburgh,PA での多様な<学び>とその喜びと悲しみの経験（1980－1981）。

２．IHSRC（人間科学研究国際会議）での<学び>と<出会い>と、その喜びと悲しみの経験。

３．時間に余裕あれば、再び、私個人の「彷徨の跡」に立ち戻る。「放浪の旅」の喜びと悲しみの経験。恐らく、時間は無い。

## 2）承：<学び>の変化の喜びとしての質（B）

<学び>、真似る、学問＝「問いを学び、学びを問う」、教育、発育、「共に育ちましょう」　<学び>の意味と構造。

<学び>とは「精神の基準線」「私、私の図式、世界の図式、世界」<eEWw>の変化だ。

. 寺田寅彦の言葉：不連続な<学び>の統合化と連続化、「日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、・・・」（「柿の種」）

<学び>の連続と不連続、通約可能世界間と通約不能世界間、<世界内と世界間>

「進歩」と「通過儀礼」Bernd Jager：世界内定住での「進歩」と、世界間移住での「通過儀礼」と。

何故「彷徨」（さまよい、さすらい）であるか。　Max van Manen、Alfred Schutz, William James,など。

**(A)「何が喜びで、何か悲しみ、であったか」世界内存在：無自覚に、自覚的に、何を求めての彷徨であったか**

筑波大学の前身、東京高等師範学校の付属小学校の国語教師　蘆田恵之助の言葉：「恵雨自伝」より。

「生・名・利・道・安・楽」（恵之助は通時的に。共時的にも、と波多野完治先生のコメント）

<私と世界>（安永浩　体験基準線）の変貌、その現実とその認識の<喜びと悲しみ>

空海：「秘密曼荼羅十住心論」「無利私利他利化」（小乗と大乗）

生：自らの<学び>による変化を<私と世界>の拡大と充実としての<悲喜>。「澄んだ喜び」、濁った喜び（利害得失の喜び）。

名：我の<学び>の他者の世界での意味付け。集団（社会・文化・歴史）を介しての、意味付け。漱石の「集合意識」、（模擬的意識、能才的意識、天才的意識：凡才、秀才、天才）（集団の時間的、空間的広がり）（人気の喜びと悲しみ、孤立の喜びと悲しみ）「連帯を求めて孤立を恐れず」の精神の<悲喜>。<学び>による変化は、同一化する集合・集団の変化を伴い、<悲喜>を伴う。時代的と反時代的あるいは非時代的（<非反>時代的）。社会的と<非反>。文化的と<非反>。集団的と<非反>。それぞれに<悲喜>あり。

利：（私利か他利か。小乗か大乗か。）それも、表GUAMか裏GUAMか。それぞれの<悲喜>の質は、<学び>の質でも、<変化>の質でもある。他者、それがいかなる他者であるかが関わってくる。他者の<悲喜>を<悲喜>すること。出会いと別離の<悲喜>。

道：<生名利>を超えた<道>あるいは<法>、<真理>を学ぶことの<悲喜>。<悲しみ>とは、時間的視点から、虚しく浪費された時間への哀惜。人生の時間の充実への歓喜。常に<名>（出会いと別離）には<利>（新旧の利害の発生変化）の影が伴う。

安：<変化する>と<変化しない>。進歩と保守。<変化しない安>と、<変化しつづける安>。<変化しない安定性Stability>と<変化に対応する超安定性Urtra-stability>（W. Ross Ashby）。<変化することで変化しない>と<変化しないことで変化する>。

楽：<生名利道安>を省みて悟って楽しむ<楽>と、さらに、その<楽>を楽しむ<楽>と。<楽>に至る<学び>の<変化>を楽しみ、ひいては、それに伴う<悲喜>を楽しむ。さらには、他者の<学び>を<学び>、楽しむ。・・・・。

<進歩>の喜び（通約可能世界内・世界内）と<通過儀礼>（通約不能世界間・世界間）の喜びと悲しみ。

新世界の<悲喜>と旧世界の<悲喜>と。たとえば、数量心理学における数学的厳密性、現象学的心理学における理解の深淵性。

<自己の変化>の喜びと<世界の変化>の喜び：<時代・社会・文化の中の自己>

<学び>の喜び：フッサール、「知的技術を創造することも、きわめて有用な応用が引き出され、世人の賞賛が得られることのできる理論を発明することもわれわれにとって十分な歓びでないとすれば、・・・」（「形式的および超越論的論理学」5）。

私はいかなる学の<学び>に喜びを覚えるか？　それは、いかなる<学び>に喜びを覚えるような私であるか、という<私>への<問い>でもある。それはまた、私は如何なる<学問>世界に生きているかという、自らが生きている<世界>への<問い>でもある。

「読むとは自己を読むなり」蘆田恵之助

(B)「何がそれを喜びとする、あるいは悲しみとする、状況をもたらしたか」

「外部からの視点」戦前の天皇制軍国主義国家から戦後の民主制平和主義国家、敗戦国ドイツの心理学から、戦勝国アメリカの心理学への熱狂的移行。日本から米国、世界諸国（アメリカ、ドイツ、スイス、ソ連）。裕福から貧困。愛国主義から国際主義。右から左、そして、中間。ローカルな所属集団により、優秀から平凡、劣等。「凡才、能才、天才」（夏目漱石）。全員一致、大多数、多数派から、少数、少数派。多数派の中の少数派、少数派の中の多数派。<学び>による変化には、所属集団の変化を伴い、この変化に伴う<悲喜>は避けられない必然であった。国内と国際。日本と米国、米国と欧州、時間的空間的社会的歴史的文化的に、狭い交友から広い交友へ。狭い視野から広い視野へ。近い視線から遠い視線へ。自利から他利へ、他利から無利（そして、利を超える世界へ）。・・・。

## 3）転：質的心理学者への祈り（A）：

**質的心理学者たちの<悲喜>は？ 何を喜びとし、何を悲しみとするか、その質は？**

「祈り」は、現実の他者に対してするのではなく、天に向けてする。それ故、独白としての「祈り」である。

**私の<質的心理学者への祈り>は、唯一つ。「本物の、真正の心理学が創造されることを祈る」**

多種多様な<学び>と、それぞれに伴う<喜びと悲しみ>の質があるに違いない。

何を喜び何を悲しむかは、実は、その私（＝自己）がどのような<私>であるか、を表現することになる。そして、それを他者に知らせることになり、自らの在り方の自覚を促すことにもなる。平凡な学部学生は、「興味があるから」をもって、自らの研究テーマの選択を理由づける（趣味的研究）。研究者もそれと同じでよいのか。すなわち、幼き探求者と同じでよいのか。 質的心理学が探究すべき「問い」―その理由も含めて―の解明こそが課題。質的心理学者に可能な<学び>とその<喜び>と<悲しみ>があろう。

生：「進歩:通約可能領域内の連続的学び」と「通過儀礼:通約不能領域間の不連続的学び」

名：いかなる、どの集合・集団における「名」であるか。多数派と少数派、多数派の中の少数派と、少数派の中の多数派、<名>の<悲喜>：虚しさを悟ることの<悲喜>、虚しさを超えることの、<喜びと悲しみ>

利：<私利と他利>、それぞれの<喜びと悲しみ> Kunzの<強者と弱者>、Levinasに<学ぶ>。

道：<世界>の理が、<私と世界>の理であることを、<理智>（＝A/B）を悟ることの<喜悲>

安：<私と世界>の安定と変化の<悲喜>：安定の停滞と、変化の不安定、安定と不安定による充実の<悲喜>

楽：（<私と世界>の安定と変化の喜びと悲しみ）を自他のものとすることの<喜悲>

## 4）結：質的心理学者への願い（B）：喜びと悲しみの質の向上のために

「本物の、真正の心理学の誕生、その創造の実現のために、自らに問いかけてきたこと、皆さまに呼びかけ、かつ、願うこと」

**質的心理学者の方々に、幾つかの合言葉（吉田章宏作）を贈る。**

A. 学問「問いこそは 学問のいのち 問うを学び 学を問うこそ 学の魂」

「問い」が大事。質的心理学者の集団・組織として、「問い」を掲げてはどうか。

数学では、有名なエルランゲン・プログラムがあった。質的心理学で「問い」の質を問うことを始めてくださいませんか。

そして、「心理学」と「質的心理学」への「問い」を問い続けることこそ、真正の学ではないでしょうか。

B. 明証「それ、本当？ 本当に、本当、ホントかな？」

フッサール「形式的および超越論的論理学」における「明証」への洞察。Thao（「現象学と弁証法的唯物論」からの引用。

「明証の本質には、自己を無効にし、自己を訂正することができるということが属している」）。「懐疑の意識」と「否定の意識」。（『経験と判断』）。「裏GUAMの 現実止揚して 表GUAM 戦い取ろう 夢と理想を」

C. 言葉「言の葉は 研究の生命 文は人 文の修行を 読みと書きとに」

心理学研究者は、数量処理の訓練は従来受けているが、文章・言葉の読み書きの訓練は、その学問分野の学徒としては受けていない。自己教育によるほかない。文学、芸術、あらゆる学芸に学ばなくてはならぬ。その<学び>の価値は、これまでは、心理学としては、認められていなかった。だが、これからは、・・・。それは、学としての心理学そのものの充実と並行する。

D. 自省「止揚しよう 甘え 傲慢 無知 怠惰」

始まったばかりで、数年で第一線に立とうと、まだ大したことはない。権威ぶるのは止めなくちゃ。「初心を忘れる勿れ」。「量」の毛嫌いでなく（Koch,S.1999）、「量」を根源的に問え。Diltheyさえ「量」に関心を。Stanley Hallの絶望。Polkinghorneの裏話。

E. 眼差し：「視野広く 視線は遠く まなざしは 鋭くあれど 温かな笑み」

従来の心理学者の特徴は、空間的視野の狭さ、時間的視線の短さ、洞察（「紙背に徹す」に至らぬ）の鈍さ、客観視の冷たさ、そして、「笑い」の貧しさ特徴的であった。それを、止揚しましょう。人間洞察を深め大いに笑いましょう。多種多様な笑い：爆笑、哄笑、朗笑、微笑、苦笑、冷笑、嘲笑、・・・。如何なる「笑い」が質的心理学の「笑い」か、その質は。

F. 真善美：「意味と意義　共に備うる　学と芸　美と豊かさを　我と世界に」

「意味不明の研究」、「意義不明の研究」から、「意味・意義を共に備えた研究に」。「問い」にも関わる。それには、広く、他の諸々の学芸と交流し、真善美を豊かに。それは、世界のみならず、自己（＝私）を豊かにすることになる。仮にそうならなければ、それは自己満足に過ぎない。＜自我と世界＞と＜実践と研究と学問＞を＜真善美＞で満たしましょう。

G ＜無利私利他利化＞（無理知りたりか？）

「私利なるか　私利超えたるか　その仕事　他利に向かいて　無利とぞなれ」

いわば、小乗から大乗への移住が、望まれている。それには、まずは、＜自己と世界＞の同時的な充実が、求められる。＜質的心理学者＞よ、＜自己と世界＞の充実した人となる日を目指しましょう。

G. 心理学の統合「心理学　混沌の中の　この学問　統合するは　質心理学」

量心理学は、外的視点から質心理学を「説明」できよう。質心理学は、世界内存在から量心理学を「理解」できよう。だが、もし、質心理学が、「量」をタブー視せず、自由であることを大切にし、明証を、言葉を、自省を、眼差しを、真善美を、他利を、大切にするならば、多種多様な心理学と心理学者たちを「理解し説明する」ことができるようになるだろう。さすれば、既にあまりにも長く待ち望まれている「心理学の多様性を通じての統合化」を実現することができよう。共感的理解不能な者同士の媒介を実現することは、質的心理学にとり挑戦すべき問題ではないだろうか？　我自らが敵対するもの（「数量心理学」）を理解すること、我と敵対するものが我（「質的心理学」）を理解しない/できないこと、その状態と状況を解明し克服して、相互理解を可能にし実現すること。この課題解決を実現することが可能なのは、質的心理学をおいて無いのではないでしょうか。量的心理学と質的心理学の統合化は、質的心理学にとって、これから挑戦すべき課題ではないでしょうか。たとえ遠い将来にとしても。

私は、いま、現象学と弁証法的唯物論との対話（Thao, Roman Ingarden）に、また、形式的存在論（フッサール）と一般的システム論（ベルタランフィ）との対話に、それを媒介する現象学と、パターンの学としての数学に、関心を抱き始めています。それは、虚しく費やされてしまったと思われた私の生涯のこれまでの彷徨の時間が、再び、充実した時として甦ってくる＜学び＞を期待させ、わくわくする喜びへの希望を与えてくれるからでしょうか。＜学び＞への憧れは尽きません。

おわりに「井の中の蛙　大海を知らず　されど　井の中を知る　大海の巨鯨　大海を知る　されど　井の中を知らず」（吉田章宏作）

## 手掛かりとしていただけることを祈願し、発表論文集の「文献表」に以下を加えます


霜山徳爾（1989）『素足の心理療法』みすず書房

武田常夫（1973）『文学の授業』明治図書

寺田寅彦（1996）『柿の種』岩波文庫

フォン・ベルタランフィ（1973）『一般システム理論』長野敬・太田邦彦訳、みすず書房

フッサール、E（1975）『経験と判断』長谷川宏　訳、河出書房新社

Bakan,David (1967) *On Method : Toward a Reconstruction of Psychological Investigation.*, Jossey-Bass

Husserl, Edmund (1978) *Formal and Transcendental Logic*, trans. Dorion Cairns, Martinus Nijhoff

（原著よりの、山口等樹［さんずいの樹］による邦訳（1976）：『形式的論理学と先験的論理学』和広出版）

Ingarden, Roman (1964-74) *Der Streit um die Existenz der Welt*, 4 vols. Max Niemeyer Verlag

Koch, Sigmund (1999) *Psychology in Human Context*, The University of Chicago Press

Thao, Tran Duc (1986) *Phenomenology and Dialectical Materialism*, D.Reidel Publishing Co.

（フランス語　原著よりの、竹内良知による邦訳（1971）：『現象学と弁証法的唯物論』合同出版）

Tictchener, Edward Bradford (1929/1972) *Systematic Psychology: Prolegomena*, Cornell University Press

Smith,David L.(1983) History of the Graduate Program, in *Duquesne Studies in Phenomenological Psychology*, vol. IV. Ed. Amedeo Giorgi & others.257-319


IHSRC Newsletter website : http://www2.seattleu.edu/artsci/psychology/Default.aspx?id=3492

Links も豊富です。2009年6月のノルウェー会議の情報もここでご覧下さい。